



西南学院大学・

図書館報

No. 4 2

1969年4月1日発行

福岡市西新町

西南学院大学図書館

図書館をよりよく利用するために

— 新入学生への案内 —

大学時代の真価は図書館をいかに利用したかによって決定されるとさえ言われている。それでは、どうすれば最も効果的に図書館を利用することができるか。図書館利用の秘訣ないしはコツといったものを二三紹介することにしよう。

(1) 資料は諸君の目の前に並んでいるオープンのもものばかりではない。洋書や貴重な文献の多くはクローズド・ブック（閉架図書）として書庫の中に収められ、諸君が直接自由に接することができないようになっている。このクローズド・ブックを利用することが肝要だ。検索は目録によらねばならない不便さはあるが、これに習熟することによって却って皆の余り利用しない貴重な文献を我物顔に利用できる満足感は何とも言えないものとなるだろう。目録のひき方は目録室に掲げてある。

(2) オープンの図書でも、求める主題の図書は必ずしも一カ所にだけ並んでいるとは限らない。与えられる分類記号は図書の刊行形式によっても異なるからである。例えば、ドストエフスキの「罪と罰」は、単行本のときはロシア文学の小説（983）のところだが、ドストエフスキ全集の中の一冊となると、ロシア文学全集（988）のところに入るし、また世界文学全集（908）の中も調べる必要がある。これは専門書でも同じであって、全集物の並ぶところを覚えておくことが大切。

(3) また、2階の開架閲覧室には指定図書が並んでいる。この指定図書というのは、学期の初めに講義担当の教授が、その講義を聞くものが必ず参考にしなければならない図書を何冊か指定したもので、相当数の副本を揃えて学生の需要に応じうるようにしてある。指定図書を十分に

活用していただきたい。

(4) ある事項を調べたいとき、必ず必要となる事典・辞書の主なものを知っておくこと。

○百科事典・人名辞典

平凡社の百科事典は諸君もよくご存知だろう。この他、定評のあるアメリカナ、ブリタニカ、ラルース、ブロックハウス等があり何れも知りたい事項の内容と程度に応じて使い分ける必要がある。人名を調べる場合、簡単なときは「岩波西洋人名辞典」「平凡社大人名辞典」「文化人名録」などが便利。文学者であれば通常の人名辞典よりはむしろ「世界文学辞典」、英米文学者のときは「英米文学辞典」をひくと文学者としての説明が詳しい。Who's Who は生存している人について Who was Who は既に死亡している人を調べるときに用いる。

○年鑑 新らしい統計資料を得たいときは年鑑を見る。

○学術雑誌・論集 論文作成のときなど、学術雑誌や大学論集を参照する必要がある。雑誌室に並んでいる「経済学文献季報」とか「雑誌記事索引」を見ると内容がのっているので参考となるものを探することができる。

(5) 別に配布される「図書館利用案内」をよく熟読し、できればいつも携帯すること。図書の分類表や諸手続きが詳しくのっているので便利である。

以上ほんの概要だけを述べたが、それらを通じて言えることは、図書館を十分自分のものとするには何よりも通いつめることが第一ということである。そして不明な点は遠慮なく係員に尋ねること。効果的な利用法は案外こんな簡単なことから会得されてゆくものである。

特集

新入学生はいかなる本を読むべきか

各教授に聞く

■ キリスト教学

森 泰男 講師

- ① ゴルヴィツァー「マルクス主義の宗教批判」
(新教新書 420円)
- ② 矢内原忠雄「キリスト教入門」(角川書店 350円)
- ③ ドッド「聖書 その今日における意義」
(新教出版社 450円)
- ④ 八木誠一「イエス」(清水書院 200円)
- ⑤ カール・バルト「キリスト教の教理、ハイデルベルク信仰問答講解」(新教新書 280円)
- ⑥ 滝沢克己「芥川龍之介の思想『侏儒の言葉』と『西方の人』」(新教新書 380円)
- ⑦ 伊藤元雄「神なき時代」(日本YMCA同盟出版部 320円)

皆さんにとってキリスト教学は恐らく全く新しい科目でしょう。しかしそれは高等学校において「倫理・社会」として学んできたものを更に、哲学とは別に宗教、特にキリスト教との関連において掘り深めて行く場に他ならない。従って文学、哲学等に広くあたってほしいと思う。さて、宗教の問題については色々の角度からとりあげられうるが、今日ではマルクス主義の側からの宗教批判が重要である。宗教は人間が勝手にでっちあげたものか、あるいは厳然として人間と社会に関わってきている根源的事実への人間の応答であるのか。その点について論じたのが①である(⑤⑥⑦参照)。キリスト教、聖書、イエスについては色々あるが、まず⑥から入って行けばよいでしょう。

■ 哲 学

三串 一士 教授

旅行をするにも山に登るにも案内や地図というものがある、それを手引きにしながら、自分の目的や好みにも合い、なお能力や経費の都合も許す限度内で、コースの選定やそのための準備や計画を進めることになる。闇雲にいきなり目的地を決めて何の準備もなしに即座に出かけられるものではない。哲学を学ぶにしても同じことである。いきなり哲学の専門書に取っ組みしてみたところで恐らく何の得ところもないばかりか、頭が少々おかしくなる位が落ちであろう。

哲学という学問にも、もとよりその案内書(Introduction to Philosophy)というものがある。普通に哲学概論とか哲学入門とか言われているものである。世界的に名のある人たちによって書かれた立派なもの、またそれらの翻訳書もいろいろとある。だからそれらのものを読んでも一応哲学というものについての大体の見当がつけられるとはいえるであろう。

しかし実際問題としては、その場合でも、一応哲学の歴史を学んで、その基礎知識の上に立ったものでなければ、問題そのものや問題相互の関連性の重要な意味を適確に理解することが極めて困難であるといえるであろう。概論といえども要するに古今の哲学思想の歴史なくしては無である。だから先ず最初にどうしてもなさなければならないのは、それぞれの哲学者たちの思想とそれらの歴史的展開の跡を曲りなりにも一通り学ぶということではなければならない。概論はその後での総まとめとして初めてその概論書としての効果を十分に収めることができるといえるのではあるまいか。人によって考え方の相異もあろうが、私は大体以上のような考えに基づいて、先ず何よりも哲学の歴史を学ぶことが先決だと思う。この意味において本学の「哲学」においては、「西洋哲学史」が講ぜられている。しかしなぜに「西洋」と名のつく哲学史なのであるか。東洋には哲学の歴史というものはないのであるか。この問いについては今ここでは字数の都合で触れる余白がない。これについては講義の際にゆずる外はない。そこで問題になるのは、どのような本を読んだらよいかということになるのであるが、日本の学者の書いたもの、西洋の翻訳もの等一々数えあげることができないほど沢山にあって、しかも各々一長一短を免かれないのであるから、諸君は自己の能力とポケット・マネーとに相談しながら、または本学の図書館で適当にえらばれたらよいであろう。その中で、ここでは次の二つだけを参考までに掲げておこう。

1. 角川文庫「西洋哲学史要」

波多野精一著 (120円)

2. 岩波文庫「西洋哲学史 上・下」

シュヴェーグラー著 谷川・松村共訳 (各150円)

■ 地 学

唐木田芳文 教授

一般教養とは、学問つまり真理を探究する基本的な態度とか物の見方・考え方を身につけることであり、社会人として物事に正当な論理的価値判断を下し、積極的に事に当ることのできる人間をつくるためにこそ、教養課程が設けられているのである。諸君の「教養」を育てるための材料・手段は、教室における勉強に限らず、心掛け次第で、これからの大学生活すべてがそうである：クラブ活動にしろ、日々の友人との交り・教師との対話にしろすべてがそれぞれの特質をもちながら諸君の人間形成のかてになるであろう。

地学を学ぶこともその一つである。地学は地球の歴史を統一的にとらえた学問体系の一つであって、地球の過去に起こった事件は歴史的必然性をもったもので、偶然なものではないことを教えてくれる。一方では、地学的知識が地球に関する謎を解き明かしてくれるし、人間の実生活に計り知れないほど貢献している。また最近話題をよんでいる、アポロ宇宙船の月着陸計画の実施に当たっても、地質学的知識は欠くことができない。

諸君が地学の勉強を通じて、地球における地学的事件を一貫して流れる自然の法則やそれに対処する考え方を会得し、また、真実を求めて祖先が如何に苦闘を重ねてきたかをくみとることができれば幸いである。この意味で次の地学入門書をおすすめる。

山下昇「地球科学入門」(国土社)；竹内均・久野久・伊藤喬三「月の科学」(NHKブック)；井尻正二「化石」(岩波新書)；竹内均「日本列島は生きている」(河出書房)；犬塚英夫「人工結晶」(岩波新書)；井尻正二 湊正雄「地球の歴史」(岩波新書)；湊正雄・井尻正二「日本列島」(岩波新書)；J. ギルリイ・A. C. ウォーターズ・A. O. ウッドフォード(金関義則・村井勇・久米羊一訳)「地学Ⅰ・Ⅱ」(平凡社)

■ 英 語

片岡 章 講師

結論からいうと、短い作品を読んでいただきたい。短時間で手軽に読めるので、実行に移し易く、さほど抵抗もなく英語に親めるからである。

例えば、短篇小説はアメリカにおいて特に盛んであるので、先ずアメリカ文学に目を向けてみるのも一つの方法であろう。しかし短篇であれ、優れた作品ほど難しいという一般的な傾向は否めないもので、その点は、大学に学ぶ者として、一通りの覚悟をもって取り組んで欲しい。また、原書を読むに際しては、難解な箇所あまり固執しないで、印をつけるなりして先に進み、適当な折に読み返してみるという方法を取るのがよいと思う。

このようにして自信がつけば、短篇だけにとどまるこ

となく中篇、更には長篇へと読み進み、貴重な学生時代をより有意義に過ごすことができると思う。

次にあげるものはごく簡単なリストであるが、これらのものを参考にしながら、各自の好みに合わせて、文学史のテキストの中から適宜に選んでいただきたい。

Sherwood Anderson : Winesburg, Ohio

Ambrose G. Bierce : In the Midst of Life

Ernest Hemingway : Indian Camp, The Killers, etc.

Erskine Caldwell : Kneel to the Rising Sun, etc.

O. Henry : After Twenty Years, etc.

Washington Irving : The Sketch-Book

Nathaniel Hawthorne : Young Goodman Brown, etc.

Edgar Allan Poe : The Black Cat, etc.

■ 経 済 学

平岡 規正 教授

経済学の入門的な知識は、高校の社会の「政治経済」で、習得しているが、高校で習ったことは、主として、経済現象の記述で、暗記すればよかった。大学では諸々の経済現象を統一的に把握するための基礎理論としての経済学を学ばなければならない。

経済学が科学である以上、他のすべての諸科学の理論がそうであるように、経済学の理論は仮説である。

経済学には、仮説を体系づけた種々の理論体系があるが、特に日本では「マルクス経済学」と「近代経済学」の二つの経済学が、支配的である。

「マルクス経済学」は唯物弁証法に依拠し、「近代経済学」は数学的に、構成されている。したがって、唯物弁証法があるいは、数学を身につけなければ、大学の経済学はものにならない。

といっても、それほど高度の数学的素養を必要としない。高校の数Ⅰ、数Ⅱ程度のもを駆使できれば充分であろう。経済学でも微分方程式をつかうが、これを差分方程式になおしてもさしつかえないし、差分方程式は、高校の数Ⅱの数列——特に「数列の漸化式」あるいは「数列の隣接諸項間の関係」という箇所での学習したこと——の応用である。

「近代経済学」を志す学生は、数学的表現を恐れない度胸をまずつけて、諸先輩の書いた本をよみ、紙と鉛筆で、出てきた数式を丹念にフォローすべきである。これを怠ると、経済理論の応用は不可能である。

「マルクス経済学」を志すものは、まずドイツ語で大学の入試が突破出来る程の語学力と弁証法的に思考する訓練された頭脳とゆたかな哲学的 (次頁へ続く)

(前頁より) 教養が要求される。

経済学は、むつかしい学問であるが、これをマスターすれば、就職してからは、大きな戦力となる。

経済学は基礎学である。

■ 法 学

清岡 雅雄 教授

法学は法規範の窮極にある正義をみつめ、実践に導く学問である。従って単に実定法の解釈適用の術を学ぶに終わらないで人の世の正しい道を思索し、襟を正して人間関係をみつめる学問である。無論現代社会の構造や社会と人間の関係を観察し、個人は社会を構成する一分子として如何に生きるべきかを想い、また、よりよく生きることの意義を発見し、単なる地域社会の住民としてではなく国際普遍の社会に生きる価値を発見することが大切である。この意味で実定法の奥には自然法の原理がかがやき、自然法の原理は人間が真実に人間らしく生き隣人の心の中に愛のともしびをかきたてようとする心構えの中に、おのづから把握し得る神の英知であることを知らなければならない。法学をこの世に処する術学としてではなく人間の意味や法と道德の関係や法と宗教の関係並びに国際普遍の道德の顕現としての国際法の意義を追求

することが大切である。憲法、民法、商法、労働法、刑法、行政法、国際法等々の個別的実定法の研究は勿論ゆるがせに出来ないが法哲学即ち法の窮極にある文化価値の探求こそ諸君にとって大切な学問であると思う。高等学校の学業をおえて志を樹てて本学に入学できた喜びと満足感にひたって居られる諸君の一層の幸福を祈りつつ法学の参考書を二、三すすめたい。

(1) 学習法学 黒田了一著 法律文化社発行
(大阪市立大学教授)

(2) 法というものの考え方 渡辺洋三著 岩波新書
(東京大学教授)

(3) 近代法の常識 伊藤正己著 文化新書
(東京大学教授)

(4) 新版憲法 鶴岡信成著 弘文堂
(国際キリスト教大学学長)

(5) 憲法動態の分析 小林直樹著 岩波書店
(東京大学教授)

(6) Elements of English Law by William
Geldart. London University Press. Tokyo. 1966.

尚憲法の本には本学の白井正教授及び清岡雅雄著『教養憲法』並びに『憲法概説』がある。 以上

■ ニュース

<図書館委員会>

44.2. 1 (審議事項) ①国連寄託図書館の運営について。②労働法の分類変更について。③専門的研究に対するサービス向上について。

44.3. 25 ①教職員利用規則・学生利用規則等の一部改正について。②昭和44年度の図書費配分方法について。

<研修・出張>

国連寄託図書館の会 44.1. 25 (於東京国連広報センター) 国連寄託図書館相互間の協力方法について協議。山下司書長出席。

<規則改正>

①教職員利用規則・学生利用規則は新館移行後も一応旧館時代のままで今日まで至りましたが、44.4. 1 付で新館の利用体制に合わせた改正がなされました。改正後の学生利用規則については、「図書館利用案内」をご覧ください。

<人事異動>

44.4. 1 付 松本容子(教務課より図書館へ)

44.4. 1 付 高橋節子(新任。当分の間図書館勤務)

■福岡県大学図書館協議会

さる2月21日(金)午前10時から本学において福岡県大学図書館協議会の研究総会が行なわれた。県下の各大学図書館から50数名の参加者があり、この1年間におけ

■ ニュース NEWS お知らせ INFORMATION

る各地区の研究成果が発表され、極めて盛会であった。

■国連寄託図書館の活動状況

昨年、国連の指定を受けて発足した国連寄託図書館は、図書館の移転後やっとその活動を開始できるようになったので、まず手始めに、国連各専門機関に広く資料の寄託の申請を出し、国連関係・国際関係のあらゆる資料の収集に努めることとした。

■個人用レコード聴取装置の購入

かねてから図書館では、備付けているレコードを聴く装置が欲しいと考えておりましたが、このほどアンプを組込んだ個人機3台を購入いたしました。これはレコードをかけ、ヘッドホーンで聴くもので、全く他人の迷惑にならない便利なものです。従ってこれまで貸出禁止であったレコードは、所定の手続きを経て、館内で鑑賞することができます。

■館内に絵・写真などが飾られた

新館の中に絵や写真が飾られました。学習室の絵は、創設期の西南学院をドージャー院長が描かれたものです。2階開架閲覧室の突当りの絵は、福相講座の寄附金により購入した、手島貢画伯の「南仏風景」です。また同室内にある雪景色の写真は、本学の古い卒業生である吉崎一人氏の作品で、国際写真コンテスト第3位入選作を寄贈されたものです。これらの絵や写真によって、新館の中が一段と素晴らしいものとなり、落ち着いた読書の雰囲気を与えられたことは感謝の限りです。